浜風会会報
第43号

浜風会/入会募集中
毎月第1,3木曜日

しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会／浜風会会報 No.43

2024.1.1

ここまで来た篠原の玉葱

丁度今、令和6年産玉葱の出荷が始まったところである。日本一の早出し玉葱としてすっかり有名になった篠原の玉葱が、どうしてここまで発展できたのかを探ってみる。

篠原玉葱（はるたま）の現在の商品力

篠原産玉葱の出荷は1月のスタートで2月をピークに3月でほぼ終わるのに対して、後続の佐賀県など概ね3月のスタートと、出荷のピークがずれていることから、おそらく今年も高単価での販売が期待される。令和3年出荷分では、全国の平均単価より2倍以上の高値を付け、味が良いという本来の特長とあいまって有利販売ができている。

定植直後の玉葱畑 日増しに緑色濃く

恵まれた環境を活かす栽培技術

それを可能にしたのは、篤農家による「早出し」を目標にした自家採種が、昭和28年から始まった。形質改善を毎年繰り返す母球選抜で、5月頃出荷していた玉葱が、今では1月出荷が当たり前になった。またとぴあ玉葱部会内の採種を行わない多くの会員にも、優良種子が供給されることで、産地全体の安定生産が可能になっている。

更に全国トップクラスの日射量と水はけの良い砂壌土に恵まれた地理的な優位性を最大限に活かすため、他地域にはない極小幅マルチ（65cm幅）を用いた二条植えを行っている。畝と畝の間に空隙ができることにより、日射量をムラなく受け、追肥も効果的になり1月出荷を可能にしている。

しかし過去には最大の危機

平成20年頃まで当地の生産を支えてきたのは、小規模経営の兼業農家や高齢農業者が主であったため、後継者不足による規模縮小や廃業が顕在化していった。その上、他の農家に引き継ぐことが難しく、作付面積は減少の一途をたどった。平成元年のピーク時571haが、平成22年には125haまで減少した。その結果荒廃農地は大幅に拡大、産地として最大の危機があった。

地域をあげての抜本対策

荒廃農地が深刻化していた平成19年、玉葱部会、JAとぴあ浜松、行政等関係機関で「玉葱産地の改革に向けたプロジェクト」を立ち上げ、これらの問題を何とか解決しようと議論を重ねた。規模拡大意向の農家や、新規就農者等担い手への農地の再配分について、地域の合意形成の場として平成21年「浜松市南部地区農地利用調整協議会」が設立された。そこで円滑化事業と言われる畑の貸し借りは、平成21年より始まり現在も続いている。貸出条件の一つ、地代は一万二千円／10a、貸借契約は、現在静岡県農業振興公社を通して行っている。そして翌年、優良農地のつなぎ役として㈱とぴあふぁー夢が設立された。

危機の救世主はとぴあふぁー夢

とぴあふぁー夢は、荒廃農地を借り入れ耕作し、再び利用可能な農地として再生させると共に、利用可能となった農地は、集積し地域の規模拡大を志向する農家や新規就農者へ引き渡している。また就農希望者を研修者として受け入れ独立を支援している。こうして新規就農者が増え、経営規模の拡大に好循環が続いている。部会内における新規就農者は16人、1ha以上の面積で経営する若者も出てきており、合計面積で16ha以上増加し、部会全体の10%を占めるに至っている。新しい担い手が存在感を高めたくましい。（山下勝彦）

長老が語った「地引網」

会員の次男、当時中学生の鈴木宏明さんが、平成五年に取材録音したテープが最近見つかった。どんなことが録音されているか、それは当時八十五歳の元船頭、鈴木三喜重さんに「地引網」について聞いたものであった。以下はそれを最近になって字起こし、その中から興味深いものを記録したものである。

仕事としての地引網は、篠原村では昭和三十七年まで続けられたとあるが、明治時代には地引網船が篠原地区全体で二十七隻あったと記録があるくらい盛んであったようだ。

「地引網のときの色見とは何ですか」

色見とは魚見のことで、回遊してくる魚の群れの見張りであり、高い所にあり、地引網の組はそれぞれ専用の色見の峠を持っていた。ワシらの三右門舟は、元役場を南に出た「三右峠」にあり、西船の「佐平の峠」、その西側が「又十峠」、馬郡には「魚見峠」があった。

峠ではサバとかアジとかが群れで来るのを見た。寒くなるとイワシの乗っている潮がきただィノ。海はたいてい青い色だが、イワシが来ると脂が浮いているみたいに海の顔がパアと照れるだ。海の色は「濁み」「深み」「ゴンド」等で変わるが、魚群と見分けるのが船頭の目だ。色見がでると船頭は大急ぎで呼ばって集めた。

「どうやって呼ばって歩くのですか」

色見が見えると「さあ、色見が見えたで」「オーーーイ」ってあるったけの声で呼ばって行くだ。「オーー、オーー、オーー」って、今いうと、とんでもない大きな声でよその知らん人が聞いたら驚くほどの声で、夜中の寝ている時に目を開かせるように呼ばるもんで…。

取材のきっかけになった昭和 63 年の体験会

「今でいうと何時ぐらいですか」

浜へ呼ばる時には日の出場に船を浮かす。それは門を回って起こすだ。船印の付いた提灯を持って。オラァ船は「かいしん丸」で小田原提灯みたいな提灯がある。それへろうそくをつけて一軒一軒…。一人だと起こして回る家が五十軒あると、ハナ（始め）からしまいの家まで起こすじゃ手間をとるだ。それでおっかァと行くとか手分けで行くだ。それで返事をするまで起こすだ。「浜へ行くぜーー」と言って起こすだ。そうすると「オーイ」って返事をせりゃまた次の家へ行く。その起こし賃が一代（しろ）つくだ。その代わり浜が悪けりゃ漁がなく代が付くわけじゃ無いだ。

「船はどのように出しますか」

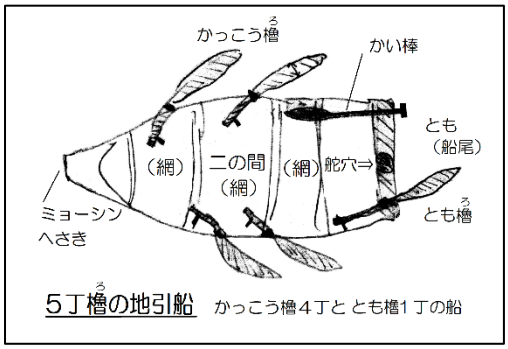
篠原の浜は遠浅づら。だもんで、櫓（ろ）のこげるところまで押し出すだ。夏の暑いときは皆裸で、二十から四十代の男が船を押し出すだ。艫櫓（ともろ）を持つのが三十代の昔でいうオヤジ、元老だ。四十から五十は尻拭きで、陸で綱を持っている番だ。

櫓がこげるようになるまで、滑りがいいようにスリ板をかって押し出すだ。スリというのは樫の木で九尺あり二本やって支える。それへ油を塗って滑るようにして船を沖へ押し

出していく。篠原の浜は遠浅だもんでスリをたくさんかわにゃならん。

「網はどうやってしかけますか」

西から東へ行く潮を「下げ潮」といい、この潮は地ィへ曳く潮だで網も軽く漁もあり、網を仕掛けるにはいい潮だ。沖と陸の距離をみるには、赤石山脈と三岳の権現をつないで、浜の峠をみて「今はどこそこの沖だ」と判断した。大きなアマダイは倉松の沖でないと捕れないので、山をつないで「今、お台場沖だ」とか赤石山脈と浜の峠とその向こうに見える山を見て「どこそこの沖だ」と判断した。それだで「魚は山でとる」って言うだ。地引船のへさきにミョーシン（水押）がありかっこいいだ。後方をトモといい、網を積むところを「二の間」っていうだ。網は二十間、これを十七ノベ。網をつないで、約六百二十メートルくらい。それだで八十人も百人もで引くことになる。ろくろという機械、機械といっていた。ハズ(稲掛け)みたいな二間のものを四本組んで、それで回っただ。一本に八人ぐらい付き四本で三十二人、百人も出る時には交代で回しちゃした。



5丁櫓の地引船　かっこう櫓４丁と とも櫓1丁の船

「どんな魚がとれましたか」

五月から六月ごろはタチウオの旬。子を持っていて一番うまい時だ。六月から七月はサバとアジだ。魚が揚がるとボウラでいなって西茶屋へ出た所の「魚問屋」へ持って行った。魚問屋に留守居番がいて「さあ、地引が揚がるぞ」という時、レイという大きな鈴を往還端で振っただ。そうするとナカシという仲買人が寄ってきて、自分の屋号と名前を書いて「付け」で買った。魚問屋は馬郡の赤門、坪井の畷にも昭和三年頃まであっただ。

魚問屋のあった所
（志都呂道の入り口）

大正十年頃は、漁があって仲村の船頭をしていた家では一年で田地一反を買った。一年で漁があったもんだで。その時には篠原でも伊勢参りに一年で二回行った。そのぐれエに漁があっただ。

「余った魚は田畑の肥しにしたのですか」

イワシの大群が一袋入ると千ボウラ以上になった。それを浜の峠へ干してみな干鰯（ほしか）として畑の肥しにしてしまっただ。売りおおせんだもんで。今のボウフウの生えているところへ干した。志都呂の方に「おテンマ（お手伝い）」を頼みに行った。

「浜チギとはどんな弁当箱ですか」

ああ、昔のたんすみたいに三つの引き出しがある弁当箱で「浜チギ」っていうだ。杉の白太で作ってあるで、水分が引くで、それこそ夏でも食べ物が腐らへんだ。また、船で波をかぶっても食べ物が水浸しにならないように引き出しがついている。それだで浜チギをもって町の方に土方にいったら「たんすを担いでいる」と言われた。それで大きな弁当箱だと（飯を）五ン合炊いたら、そこへ収まるわけだ。

浜チギ

おわりに

県下有数の地引網漁場として栄えた篠原村の地引網は昭和三十七年で終了した。時とともに人々の記憶や記録が薄れていく中での貴重な調査記録である。　（文責　鈴木理市）

バス旅行久しぶり

令和5年11月16日に、NHK大河ドラマ「どうする家康」の舞台になった安城市の本證寺と西尾市吉良町の華蔵寺などを訪ねました。当日は好天にも恵まれ、参加者26人の楽しい旅行となりました。

三河一向一揆の舞台となった本證寺

住職より本證寺は13世紀末頃浄土真宗大谷派の寺院として開かれ、15世紀後半に本願寺門徒・一向宗に転じた寺であることが紹介された。「なぜ三河一向一揆が本證寺で勃発したか」「一旦和議が結ばれた後、なぜ家康が一方的に本證寺に攻め込み、建物を全て破却し、坊主衆を領国から追放したか」など分かりやすい説明がされました。

本堂内で住職の説明を聞く

境内は二重の堀と土塁に囲まれた城郭寺院で、堀と土塁は今なお一部が残っていて、昔の面影を偲ぶ事が出来ました。建物は一揆後、全て破却されましたが、寛文3年に本堂が再建され、以後、鐘楼、鼓楼、庫裏などが続いて再建され、現在も当時の姿を残しています。

吉良家菩提寺・華蔵寺

忠臣蔵で有名な吉良上野介のお墓がある華蔵寺を訪ねました。華蔵寺は慶長5年に創建された臨済宗妙心寺派の禅寺です。

御影堂には吉良上野介義央公の木像が祀られ、隣の墓地には義央公の父義安公以降代々の墓が並んでいます。「吉良あない人」から義央公は地元では稀代の名君とたたえられていた事や、吉良側から見た仇討ち事件の説明を、興味深く聞きました。

最後に小堀遠州が作庭した枯れ山水庭園を鑑賞しました。

吉良上野介の墓

国宝の金蓮寺弥陀堂

優美な曲線を描く檜皮葺の屋根が美しい弥陀堂は、「吉良あない人」によれば、愛知県の国宝建造物3件中の1件である事や、全国にある鎌倉時代までに建てられた阿弥陀堂建築20棟あまりの中で国宝に指定されている。理由は貴族住宅風の仏堂が醸し出す優しい美しさが高く評価されたものだそうです。堂内の阿弥陀三尊像は鎌倉時代のもので、弥陀堂とよく調和しており、優しさを感じました。

国宝弥陀堂の説明を聞く

旅の最後は、近くにある「人生劇場の尾崎士郎記念館」と「豪商の旧糟谷邸」を見学し帰途につきました。

（藤田博辞）

浜風会会報第４３号
篠原協働ｾﾝﾀｰ同好会浜風会」
（篠原地区郷土の歴史を学ぶ会）
編集委員　委員長　山下勝彦
鈴木忠　鈴木理市
藤田博辞　山中道弘
発行責任者　山下勝彦
発行　令和６年１月１日